

師は又釋籤・疏記・輔行三十卷の末文を重て消釋す。天台六十卷とは是也。玄義には、名體宗用教の五重玄を建立して、妙法蓮華經の五字の機能を判釋す。五重玄を釋する中の宗の釋云、如提綱維無目而不動、牽衣一角無縷而不來。意は此妙法蓮華經を信仰し奉る一行に、功德として來らざる事なく、善根として動かざる事なし。譬ば綱の目無量なれども、一の大綱を引に不動目もなく、衣の絲筋巨多なれども、取一角絲筋として來らざることなきが如しと云義也。さて文句には、如是我聞より作禮而去まで、文文句句に因緣・約教・本迹・觀心の四種の釋を設けたり。次に止觀には、妙解の上に所立觀不思議境の一念三千、是本覺の立行本具の理心也。今爰に委くせず。悅哉、生を五濁惡世に受といへども、一乘の眞文を見聞する事を得たり。熙連恆沙の善根を致せる者、此經にあひ奉て信を取と見えたり。汝今致一念隨喜信。函蓋相應感應道交無疑。愚人低頭舉手云、我今よりは一實の經王を受持し、三界の獨尊を本師として、自今身至佛身此信心敢無退轉。設ひ五逆の雲厚くとも、乞ふ提婆達多が成佛を續、十惡の波あらくとも、願くは王子覆講の結縁に同からん。聖人云、人の心は水の器にしたがふが如く、物の性は月の波に動くに似たり。故に汝當座は信ずと